

「お役人様、それを持っていかれたら、おらたち飢え死にしてしまうだ」昔話で出てくるこのやり取りが私の税金のイメージでした。権力者が農民から年貢を取り立てる、そんな印象でした。現在でも大人が、なぜか給料から引かれていて、それで公共施設や道路ができているとか、消費税が十パーセントになって、高いけど計算が楽だな、といった認識で私にとっては遠い物と感じていました。

学校で行われた税金教室の後、父とそのような話をしたら、「何言ってるんだ、うちは税金ととても近いところにあるんだよ」言われてしまいました。私の家は造り酒屋を営んでいます。言われてみれば、父は毎月末に酒税の申告書を作るのが大変だと言っていました。確かに、日本酒は飲み物なのに管轄が税務署であることを不思議に思っていました。

そこで色々と調べてみると、特に間接税に面白いものがありました。酒税、たばこ税、入湯税、ゴルフ税、航空燃料税、自動車重量税などです。主に嗜好品にかけている税金で、あってもなくてもよい物にかけているという雰囲気の記事でした。しかし、裏を返すと、あってもなくてもよい物、すなわち誰も保護しなくてよい物という解釈もできてしまいます。それでは嗜好物という文化が衰退してしまいます。そんな産業の保護のために税金は使われています。

酒税を例に挙げると、酒税は鎌倉時代以前に存在し、特に明治、大正時代は税収のトップで、日本の近代化に大きく貢献しました。税収の安定化の為、国立の研究所も造り、近代的な研究もされました。父も年に数回、酒類総合研究所や関東信越局の講習会に参加しています。今では、酒税により徴収された税金で日本の文化であるお酒造りの継承と普及にも税金は役立っています。最近では日本酒は海外で人気があり輸出量は伸びており、日本文化を代表する飲み物となっています。その普及活動にも税金は使われています。

その他でいえば、ゴルフ税は周辺環境保護、青少年にゴルフの普及、入湯税は観光の促進や周辺設備の整備、航空燃料税は騒音対策や空港整備と、その活動を支えるために必要な公共事業もそれぞれの間接税が担っていることを知りました。

私は今まで、税金というと、公共事業や、公務員の給与といった、直接的で目に見える部分しか知りませんでした。しかし、歴史と税金は切り離せない物で、その時代の世相を反映し、文化の育成にも貢献してきたのだなどと改めて感じさせられました。富の再分配という税金の大きな意義は素晴らしいものだと思います。しかし、それ以外にも税金により、伝統文化であったり、スポーツ文化、観光資源といった物の保護を育成し、後世につなげていく役割も税金はしてくれています。そして、それを将来担っていくのは私達の責任だと強く思いました。